



『早春賦』

作詞：吉丸 一昌

作曲：中田 章

春は名のための風の寒さや
谷の鶯 歌は思えど
時にあらずと声も立てず
時にあらずと声も立てず

氷溶け去り葦は角ぐむ
さては時ぞと思うあやにく
今日もきのうも雪の空
今日もきのうも雪の空

春と聞かねば知らでありしを
聞けば急かるる胸の思いを
いかにせよとのこの頃か
いかにせよとのこの頃か



「理不尽」

校長 蒲谷 猛

先日、次男と二人で呑みに行きました。家族や親戚、ご近所のBBQなどでは一緒に呑んだことはありましたが、二人っきりというのは初めての経験でした。息子と差しで呑めるなんて本当に幸せなことです。

次男にかかわって、自分の心の中にずっと引っかかり続けている思い出があります。いや、思い出にならずに、申し訳ないと思いつつ続けているわだかまりと言った方がいいかもしれません。

次男が何歳の時だったかは定かではありませんが、何度言ってもゲームをやめない息子に腹が立って、思わずゲーム機を取り上げて「こんなものいらぬ。」と言って放り投げました。もちろん壊すつもりはなかったのですが、その放り投げられたゲーム機は床に当たった瞬間、パーンと2つに割れて、画面側と操作ボタン側にちぎれてしまいました。「しまった」と思ったときにはもうどうしようもなく、プレゼントしたときに大喜びをしてからずっと大切にしてきたゲーム機が私の手で壊されたときの息子の表情が今でも鮮明に残っていて、もう何年も経った今でも、ふとした瞬間に心を締め付けてきます。

消えることなく頻りに反芻してくるこの記憶について、二人っきりの機会をとらえて、息子に聞いてみました。「大切なゲーム機、自分が壊しちゃったときのこと、覚えている。」「うん、もちろん。よく、覚えている。」「自分は、悲しんでいる表情が忘れられず、悪かったって、ずっと思ってるんだ。そのときどう思ったの。」「すごく悲しかった。」「他には。」「『理不尽』だなと思った。」

教育の場では、「『怒る』と『叱る』は全く別物」と確認し合う場面がよくあります。「怒る」は指導者が腹が立っている状態、「叱る」は、冷静に子どもの適切でない言動を諷めたり抑止したりしている状態という意味で「別物」というわけです。「叱る」だって、往々にして相手の心には染み入らずに終わってしまうことが多いのに、わたしの次男への行為は「怒る」も良いところですから、全く下の下、恥ずかしい限りです。

これ以降、私は、親としても教師としても、「怒る」ことはもちろん、「叱る」ことも極力しないように努めてきています。ていねいに対話すること以外、相手の心に入り込む手段はないと感じています。何度言っても行動変容が達成できないことを、いくら叱っても何も成長しませんよね。「どうしたの。」「どうしたいの。」「どうすればいいと思うの。」と問うて、成長に向かうための次の一歩について一緒に考えていかないと。

息子と呑みながら話しているうちに気付いた、もう一つの私の失敗。「謝ってくれて、気に入っていたのと同じディープレッドのDS探して買ってきてくれたけど、壊れたのは3DSで、もらったのは2DS。グレード下がって戻ってきた。笑」黙って受け取ってくれていたのですね。しかも、今まで言わずに。10歳ばかりの子どもに完敗です。